

初期リタイアメントコミュニティにおけるボランティア活動の展開

—アリゾナ州サンシティの事例—

木 村 オリエ

1 はじめに

地域コミュニティで展開されるボランティア活動は、コミュニティにおける居住者の生活の質的な向上ばかりでなく、コミュニティのメンバーである近隣居住者同士の人間関係をも築く、有意義な活動であるとされる（Breecher and Garrison 1992；蓮見 1991）。阿部（2001）は現代のボランティア活動が担う諸役割として、①公的制度の不備を補う補充的な役割、②地域の福祉ニーズに積極的に応えようとする先駆的な役割、に加え、③地域社会を守り育てる相互扶助の精神を普及する啓発的な役割、④居住者同士の理解者・協力者として作用する架橋的役割を挙げている。

手島・冷水（1992）は、こうしたボランティア活動を「定年後の新たな人的ネットワークの活性化の活動」と評価する。また前市岡（1996）は、「人生で培った豊富な経験を活用する自己実現のための活動」と評価している。将来的な高齢化の進展に伴い、ボランティア活動は高齢者集団にとっても、ネットワーク形成や、生きがい作りに、特に重要な意味を持つとされている。

高齢者の人的ネットワークの縮小や社会参与の問題は、ボランティア活動などの社会的活動によって、既存のものに代わる人間関係や社会的な役割を再構築することによって解決していこうとする可能性が高まる（谷口 1980；本間 1982）。引退後生まれてくる余暇を利用できるボランティア活動は、引退によって生じる高齢者と社会との距離を補うものとして、高齢者集団にとって有意義な活動であるといえよう（伊藤 2003）。

また、ボランティア活動は、高齢者にとって家庭内や職場内での豊富な経験に基づく知識や技術を活かすことのできる絶好の機会としても期待されている。彼らの能力を自己実現として発揮できるボランティア活動の場は、同時に社会的にも大

いに期待されており、高齢者はボランティア供給の担い手としても見込まれている。しかしながら、わが国では地域コミュニティにおけるボランティア団体数および活動人口は、ここ数年間で増加しているものの、その活動従事者は、主婦や学生を中心とした若年層であり、そこに活動主体としての高齢者の姿は、なかなか見当たらない（小澤 2001）。

一方、アメリカでは、ほとんどすべての分野にボランティア活動が入り込んでおり、そこには高齢者の参加が目立つ。彼らは福祉や教育などの分野に加え、選挙監視や消防・救急などの分野にもボランティアとして加わり、他世代と共に積極的に携わっている（Krumholtz and Star 1996；LISC 2002）。このようにアメリカでは、公的施策を基盤としながらも、多様な地域居住者の相互扶助によって質的向上を図り、さまざまなニーズに柔軟かつ繊細に対応した居住者参加型の福祉社会が実現されつつある（地域開発 1994）。

ケルナー（1981）は、その要因を、キリスト教における慈善の精神や、これに根ざした相互扶助の長い伝統に求めている。しかし同時に、ボランティア活動の費用や時間等負担の軽減によって、参加希望者が活動から疎遠にならない仕組み作りに成功していると指摘する¹⁾。さらには、ボランティア活動の互酬的義務についても考慮し、活動が経済的価値以外の対価をなすべきものだとしている（Allen and Rusthon 1983）。

アメリカの初期リタイアメントコミュニティであるアリゾナ州サンシティでは、コミュニティ内の公共サービスを行政に代わって居住者が引き受けている。居住者相互がサービスの需給に関わるというシステムを持ち、実際に生活のあらゆる部分が居住者のボランティア活動によって支えられている。高齢者のボランティア活動による社会参加が必ずしも活発ではないわが国の現状と比較すると、「高齢者によるボランティア活動が、なぜ

コミュニティのサービスを支えるほどまでに盛んなのか」という点で非常に興味深い。

一般的にリタイアメントコミュニティへの誘引要素には、4つあると言われている(田原・岩垂1999; 平井1999; 藤崎1994)。「①安い生活コスト」, 「②アメニティの充実」については日本の高齢者研究においても重要視されている。だが、アメリカの高齢者にとって、引退後のアクティブな生活は重要な決定条件になっており、「③アクティビティ機会の充実」, 「④生きがい・自己実現」などは、リタイアメントコミュニティのボランティア活動を考察していく上で欠かせない要素と考えられる。

そこで本研究では、なぜ居住者がコミュニティのボランティア活動に盛んに取り組むのかといった疑問から、「居住者を活動へと巻き込むような工夫が、ボランティア活動の運営手段として意図的に盛り込まれていること」、また彼らによる「積極的な活動への参加が、(ケルナーが指摘するような)参加機会の設定や、活動の成果に対する対価(評価の方法)などにより促されていること」などを研究仮説とし、居住者を積極的にボランティア活動に従事させていく、いわば「お膳立て」の要素を明らかにする。

本研究の目的は、初期リタイアメントコミュニティであるサンシティにおいて、居住者をボランティア活動に取り込んでいく仕組みについて考察していくことである。ここで得られた知見は、日本における高齢者による社会参加の機会の不足や、そこに介在する諸問題を考えていく上で有効なものである。同様に、日本の地域コミュニティを維持・発展させていく主体の問題に関しても、居住者による積極的なボランティア活動の事例は、貴重な考察材料となると考える。

2 引退生活の舞台としてのサンシティ

1960年代から現在まで、アメリカでは引退した高齢者たちのために、リタイアメントコミュニティと呼ばれる住居群を開発・分譲している。リタイアメントコミュニティとは、シニア層(通常55歳以上)に入居を限定したコミュニティのことである。住居形式はマンション、アパートメントなどの集合住宅から、一戸建てまでバリエーションに富み、規模もさまざまである。

コミュニティ内では、ゴルフコースや野球場、リクリエーションセンターなどの余暇施設はもちろん、教会やショッピングモール、病院などの施設が完備されており、高齢期の居住者にとって必要とされる生活インフラが整っている。近年では、居住者へのサービスやコミュニティ内の施設のニーズも多様であり、中産階級以上の引退者世帯のために高級志向のコミュニティが流行している²⁾。いずれにせよ、アメリカにおいてリタイアメントコミュニティは、引退後の生活をより良く送るための場所、または自分が死を迎えるまでを過ごす「終の棲家」として認識されてきた経緯がある(神中2000)。つまり、勤めや家事など社会的役割から自由になった高齢者が、引退後の自分の生活において、社会とのあらゆる関わり方を改めて選択できる場所である。

もともとアメリカの家族にとって、親子が各々独立した世帯で暮らすことは一般的である。たとえ介護を要する身になったとしても、子どもに頼るケースは非常に稀である。そのためにリタイアメントコミュニティでの生活は、引退世代にとって、一人暮らしに不安を感じることなく、新たな人間関係を構築する可能性を大いに秘めた、老後の安全で豊かな生活の魅力ある選択肢の一つである。

アリゾナ州サンシティは、リタイアメントコミュニティの先駆けとして、アメリカのみならず世界的にも有名なコミュニティである。近年、リタイアメントコミュニティにおける居住者のコミュニティ内での社会参加のあり方が多様化する中で、サンシティではコミュニティ内のサービスを行政に代わって居住者が引き受けている。生活サービス、特に本来行政によって提供されてきた生活保障に関わるあらゆるサービスの部分が、居住者のボランティア活動によって支えられている。長年の経験に基づく豊富な知恵や技術や、引退によって生まれた時間的余裕から、コミュニティにおけるボランティア供給の担い手として期待されている高齢者の活動の舞台として発展してきた経緯について以下、述べてみたい。

アリゾナ州サンシティの設立・開発主体となるデル・ウェブ社(Del Webb社)は、第二次大戦後アメリカにおいてリゾートホテルやカジノホテルなど、ホテル事業を手がけていた企業である。当初は、西海岸や南西部の温暖な都市に限定した

事業を展開していた。近年では温暖な都市のみならず、寒冷な北東部など、全米各地にも建設されている。今回研究対象地域となるアリゾナ州サンシティは「オリジナルサンシティ」と呼ばれ、サンシティグループがアメリカで初めて建設したリタイアメントコミュニティである（以下、サンシティと略称）。

リタイアメントコミュニティ・サンシティは、1959年から着手した開発事業のひとつである。サンシティの建設は、アリゾナ州の大地主である綿花栽培企業ボスウェル社（the Boswell Corporation）と提携して開始した。共同出資会社であるデル・ヴェップ開発会社（DEVCO: the Del Webb Development Company）は、何もない綿花畑に囲まれたサンシティに居住者を引き込むために、ゴルフ場、レクリエーションセンター、ショッピングモール等の建設から開始した（図1）。

住宅自体は従来のアメリカの一般住宅と相違はなかった。だが、高齢期に差し掛かる居住者に向けて多様な余暇活動や社会活動など、「活動的な生活スタイルを可能とする高齢者コミュニティ」

というコンセプトが当時の居住者にとって新鮮だったようである。その結果、1960年に始まった分譲から1ヶ月で約400戸、1年で約2000戸もの住宅が売れた。1978年の完成以降、運営権は徐々に居住者とその運営委員会（HOA）に委ね、デル・ヴェップ社は撤退する。運営委員会はすべて居住者で組織されており、以降はこの運営委員会がサンシティを運営・管理していくことになった（Del Webb 2003）。

サンシティの法的な位置づけは、非行政コミュニティ（Unincorporated Community）である。非行政コミュニティは、他コミュニティとは明確な境界線を有するが、その中には地方行政や市に準じた行政機関は一切ない。カリフォルニアやフロリダなどにもこうした非行政コミュニティと呼ばれるコミュニティが存在するが、これらのコミュニティはすべて郡（County）から直接的に行政サービスを受ける。アメリカのリタイアメントコミュニティでは、非行政コミュニティが多数存在しているが、中には行政コミュニティとして「市」になったところもある³⁾。

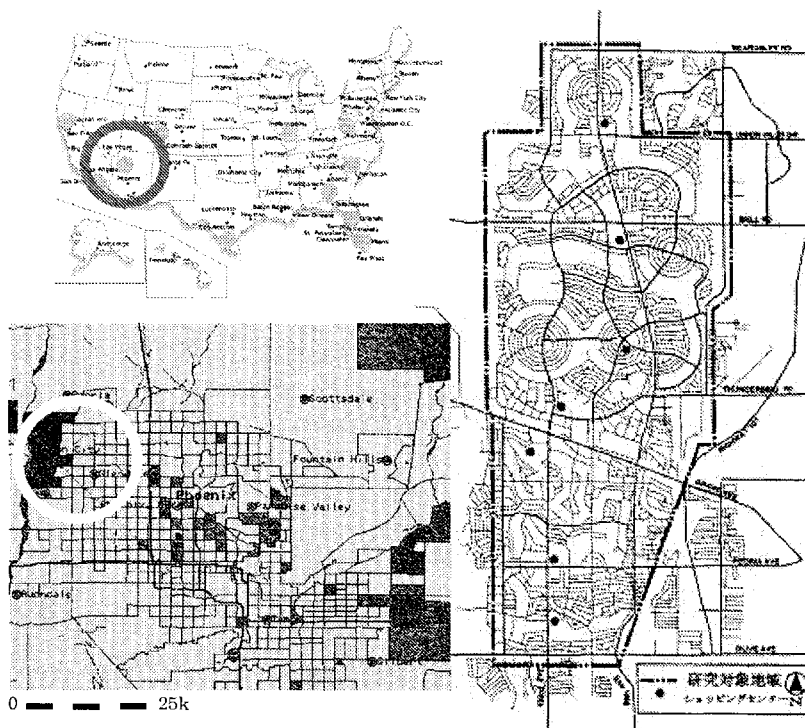


図1 研究対象地域 The Original Sun City

注：全米地図はサンシティグループのリタイアメントコミュニティの分布を示す。

現在、サンシティでは「市」への変更はない。隣接するマリコパ郡 (Maricopa County) がサンシティの行政を管轄⁹⁾しており、行政サービスなどをマリコパ郡から享受している。そもそも、サンシティに「市」としてのステータスがないのは、市税等の負担を逃れるためという経済的理由からである⁹⁾。だが、最も重要であると思われるのは、最低限の行政サービスでとどめ、残りを居住者で補完できるような、ボランティア活動が充実していることである。このようなボランティア活動は、地方行政がカバーしきれないような細やかサービスも提供している。

表1は2000年現在のサンシティの人口構成を示したものである。サンシティの人口は、通年居住者が35,759人である。居住資格は、シニア向けコミュニティであるため、55歳以上から得ることができる⁹⁾。スノーバード¹⁰⁾と呼ばれる季節居住者を含めると、42,500人にも達する。住民の人口総計は1980年から比べると40,505人、2000年では38,309人となっており、20年間で居住者は2,196人減っており、やや減少気味である。1990年からの各世代の内訳を見てみると、85歳以上の居住者人口は10年間に2,203人増加している。平均年齢は、73.4歳であり、年々定住人口の高齢化が進んでいる。このことは、また85歳以上に達するまでにサンシティを離れる居住者が多いことを示している。だが一方で、54歳未満が1980年の101人から10年間でおよそ2倍の205人に増加し、55-64歳 (2000年は別内訳を合わせたもの) の前期高齢者人口が4,226人から1,303人 (1.3倍) 増加し、5,529人にまで昇っている。こうしたこ

とから、サンシティでの居住者人口は、ただ高齢化の一途をたどるばかりではなく、確実に次なる若い世代の居住者を迎え入れていることがわかる。若い居住者人口の増加は、サンシティにとって新たなコミュニティの担い手、つまりコミュニティを支える新たなボランティア活動の活動者を、絶えず再生産していることにつながっているといえるだろう。居住者の手によって公共サービスの賄われているサンシティでは、定住人口が高齢化するばかりではなく、居住資格内での比較的若い居住者が転入し、ボランティア活動主体の世代交代が行われていることは「ボランティアの街」サンシティにとって、重要であると思われる。

新旧問わない居住者が、いかにボランティア活動に従事して、公共サービスを支えるまでの活動へと展開させていくのかを見ていきたい。

3 サンシティのボランティア活動

3.1 ボランティア組織の内容

サンシティ誕生当初は、レクリエーションセンターが余暇活動の充実に努め、ホームオーナー協会 (The Sun City Home Owners' Association (HOA)) がマリコパ政府との行政的な橋渡しをしていた。しかしコミュニティの運営はこれだけでは追いつかず、解決策としてその後問もなく出来たのが治安や消防、道路清掃などの公共サービスを補う居住者のボランティア活動組織であった (Ken Meade Realty 1998)。

ボランティアサービスの内容に準じて区分した (表2)。活動組織は表以外にも、各内容について

表1 サンシティの人口構成

単位: 人

	1980年 (%)	1990年 (%)	2000年 (%)
54歳未満	91 (3.9)	101 (4.3)	205 (5.7)
55-59歳	8889 (21.9)	4226 (11.1)	2019 (5.3)
60-64歳			3510 (9.2)
65-74歳			11491 (30.0)
75-84歳			13558 (35.4)
85歳以上	9967 (24.6)	3324 (8.7)	5527 (14.4)
計	40505 (100.0)	38126 (100.0)	38309 (100.0)

(日本地理学会春季大会2005高齢者の地理学研究グループ平井発表資料, 全米国勢調査2000より作成.)

表2 サンシティの主なボランティア組織

コミュニティの運営	Home Owners' Association (HOA)
余暇施設の維持・管理	Recreation center of Sun City, Inc
コミュニティの案内	Visitor Center
行政的サービスの補完	Sheriffs Posse (自警団)
	Fire Department (消防団)
	Proud Residents Donating Essential Services (PRIDES/清掃団)
	Interfaith Services (医療・介護サービス)
福祉サービス	The Sunshine Service (機器の貸与)

(HOAパンフレット, 聞き取り調査より作成.)

およそ20～30近い組織が存在しており、居住者はこのようにバラエティー豊富な選択肢の中から、自分の関心や経験・技能に見合った活動内容を選ぶことができる。多様な居住者のニーズに応えるようなバラエティーに富んだボランティア活動の内容とそのコミュニティ内での役割を個々に見ていく。

まず「コミュニティの運営」や、「余暇施設の維持・管理」に関わるボランティア活動として、サンシティ設立当初から住宅の斡旋や居住者の登録・管理を行い、コミュニティの運営主体となってきたホームオーナーズ協会（The Sun City Home Owners' Association (HOA)）やサンシティレクリエーションセンター（Recreation center of Sun City, Inc.）、「コミュニティ内外の案内兼窓口」としてのビジターセンター（Visitor Center）などがある。ホームオーナー協会は、世帯オーナーを中心とする組織であり、サンシティ内の住宅の斡旋から居住者の登録・管理まで行う。自治会・町内会的存在であり、実質的にコミュニティの運営主体である。ホームオーナー協会と関連し、居住者で組織される運営委員会は、各種規制の決定や施行をする。協会に加入するのは強制ではないが、会員のみが委員の選任権やコミュニティの意思決定に関する投票権を持つ。レクリエーションセンターは、図書館や大型ホールを併設した8つのレクリエーションセンター、8つのゴルフコースなどを管理している非営利会社である。ボランティアによって運営され、その予算は意思決定組織である運営委員会が管理している。一日あたりの利用者も多く、日常業務は居住者のボランティアによって賄われている。

また、「行政的サービスの補完」の機能組織として、コミュニティの治安維持をつとめる自警団（The Sun City Sheriff's Posse）や消防団（The Sun City Fire Department）、道路清掃やごみ収集作業を行う清掃団（Proud Residents Donating Essential Services）などがある。自警団は、カウんティ警察を補完し、治安維持を請け負っている。170人の制服警官、15台のフル装備パトロールカー、自前の無線設備、警察ビルを擁し、本格的なサービスを行っている。交通事故や緊急時の交通整理や巡回パトロールのほか、依頼により長期不在時の特別パトロールなども行う。ボランティアサービスではあるが、利用者は彼らのサービスに対し

ては「寄付金」を払うことが習慣となっている。消防団も同様に消防業務を行う、ボランティア組織である。55歳以上の居住者を中心とした48人で構成されており、フルタイムで救命・救急も行う。

清掃団は、1980年に道路、公園の管理運営権がマリコパ郡に移譲された際に発足した。現在は、約300人のメンバーが総延長210マイル（約336km）の道路清掃、ごみの収集、公園の水撒き、樹木の選定、散水システムのメンテナンスなどに従事している。マリコパ政府の試算によると、行政サービスに換算すると年間50万ドルにも及び、社会的な有用性が高い。

最後に、コミュニティ内の「福祉サービス」を担う組織である在宅介護サービス、居住者に対するカウンセリングを行なうインターフェイス・サービス（Interfaith Services）、居住者向けに医療機器の貸与を行なうサンシャイン・サービス（The Sunshine Service）などがある。インターフェイス・サービスは、宗教組織を兼ねた組織であり、病人や障害のある居住者などに対して、各種医療、カウンセリング、住宅介護サービスなどを提供している。また、約2000人以上の居住者ボランティアが活動するボスウェル記念病院（Boswell Memorial Hospital）もある⁸⁾。こうした活動は近年のサンシティにおいて特に必要とされ、ボランティアによるサービスが期待されている。

3.2 居住者のボランティア活動へのアクセス

サンシティのボランティア活動に取り組む居住者の参加までの「お膳立て」を掴んでいく上で、いかに活動に参加しやすい仕組みづくりを整えているのかは重要な点である。つまり、居住者からボランティア活動までの「アクセスの良さ」についての関心である。

例えば、日本のボランティア活動参加の場合、その窓口は常に役所など行政の統轄するコミュニティセンターなどの機関であることが多い。こうした窓口では、特定の場所にて、特定の時間内でしか、参加の情報を希望者に公開することができない場合が多い。同様に、多様な活動内容、活動スタイルを志向する居住者の希望や相談に応じることは、非常に難しくなることも予想される（光浦1979）。

資料1は、サンシティのボランティア活動に参

加するための登録申請書である。この申請書はサンシティに入居した当日から居住者一人一人の手元へ届けられることになっている⁹⁾。この申請書は、コミュニティ内に7箇所あるレクリエーションセンターいずれかのカウンターにも常備しており、また自宅からインターネットを介して入手することも可能である。こうして居住者は、あらゆるボランティア活動についていつでも、気軽に申

請することができる。

このボランティア活動登録申請書の記入欄には「名前、住所、電話番号」の他に「居住年数」、「定住者が季節居住者なのか」、「週に何回活動できるか」「希望の活動内容」「活動の日時・時間帯」など書き込む欄が用意されている。居住者は、生活リズムや自らの持てる技能・知識に合わせた活動が選択できるようになっている。こうした工夫により、居住者が自身の生活時間を犠牲にすることなく、自らの持てる時間の中で、得意な分野での活躍が可能になる。サンシティ居住者にとって活動参加は、非常に身近で、日常生活を構成する一部ともなり得る活動である。こうした背景には、参加する個人に負担のない、持てる時間や能力の範囲内でのボランティアを可能にするという配慮が伺える。

参加者がボランティア活動を行うまでの手続きは、どのようなになっているのであろうか。一連の流れを模式化したものが、図2である。参加希望者である居住者は、各窓口へボランティア活動登録申請書を提出することになる。窓口となるのはホームオーナー協会やレクリエーションセンター (Recreation center of Sun City, Inc.) や、ビジターセンターなどの組織である。

窓口となる組織では、居住者とボランティア組織との間に入って、ボランティア活動のコーディネートが行われる。いわばこれらの組織は、活動のマッチングシステムの「中心的役割」として機能することになる。参加希望者によって提出された登録申請書に従って、居住者の活動希望内容と

Sun City, AZ Visitors Center
 Enriching A Vibrant Community Lifestyle

**Sun Cities Area Volunteer Council
 Volunteer Application**

Date: _____

Name: () Mr () Ms _____
 Last Name First Name Spouse's 1st name

Address: _____
 Sun City Zip Code

Phone: _____ Fax: _____ E-mail: _____

I have lived in Sun City for _____ years.

Year around () Yes () No

If No, during which months do you live in Sun City _____ thru _____

I would like to volunteer for _____ days per () week () month.

Check or mark all that apply.

Area of interest: _____ Visitor Greeter _____ Telephone Worker _____ Tour Guide
 _____ Fund Raising Committee _____ Visiting Speaker Bureau

Do you speak a foreign language? () Yes () No If yes, what language _____

Days and Time available - Please give at least two choices, if possible.

9:00-12:30 12:30-4:00

Monday _____
 Tuesday _____
 Wednesday _____
 Thursday _____
 Friday _____
 Saturday _____

Brief background information (Experience, occupation, hobbies, etc. that could be of value at the visitors center)
 Write on the back of this form if necessary.

Thank you for your desire to volunteer since volunteering is the lifeblood of the Sun Cities. In the event there are no openings at the Visitors Center please check other organizations in which you have an interest on the back of this application. We will do our best to serve your desire to volunteer.

資料1 ボランティア活動登録申請用紙

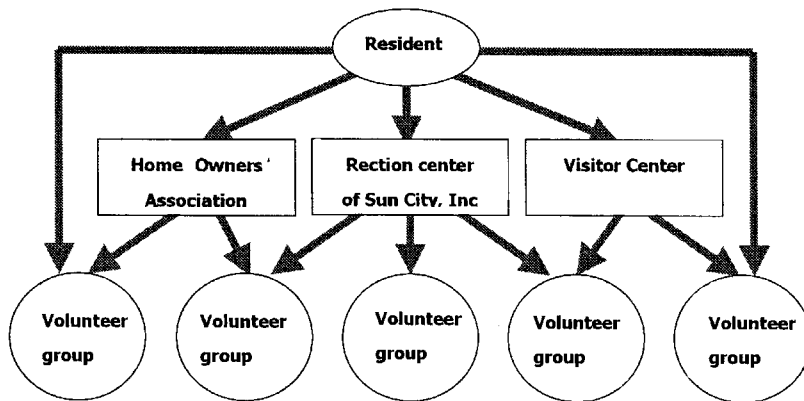


図2 ボランティア活動参加までの模式図
 (HOAパンフレット、聞き取り調査より作成。)

様々なボランティア組織の活動を照らし合わせる。希望内容に合えば、登録申請書を提出した居住者に対して、当該のボランティア組織を仲介する。インタビュー調査によれば、ビジターセンターなどの窓口では、登録申請書の中に記された希望に対しては、複数の選択肢を紹介するという。居住者は、その中から最適な活動や活動グループを最終的に自分自身で選び取り、決めることができる。

①居住者にとっては、あくまで自主的な活動参加を支援するシステム作りが工夫されている。

②こうした方法により、仲介側から一方的に押し付けられたような形での活動は回避でき、参加者である居住者自身が率先して決定することができる。

③活動内容や組織の雰囲気は自分にとってふさわしいものなのか、またボランティア活動の内容そのものが自らの生活にとって無理のないものかなど、居住者は活動を取り巻く全体的な情報を見極めた上で、始めて活動を行うことができる。

これらボランティア活動の窓口となる組織は、あくまで活動のコーディネートを行う仲介者という位置付けなので、もちろん居住者自身が、希望するボランティア組織に直接登録することも可能である。そうした場合でも、インターネットによる簡単なアクセスが可能になっている。

4 ボランティア活動の参加と居住者

4.1 サンシティ居住者によるボランティア活動の活動状況

以上の見てきたように、居住者がひとたび活動を希望すれば、非常に簡単な手続きを経て、ボランティア活動にアクセスできることがわかる。

ところで、サンシティ居住者によるボランティア活動の経済的価値は、年間およそ1720万ドルともいわれている（Del Webb 2003）。居住者の年間納税額がおおよそ3200万ドル程度であることを考えれば、ボランティア活動の経済的な影響力は、相当な大きさであることがわかる。

このような経済的影響力からも読取れる盛んな活動であるが、そもそも生活に必要な公共サービスを支えるほど盛んな居住者ボランティアが、どの程度の取り組みをもとに、影響力を及ぼしているのかを検討してみたい。バラエティーに富み、居住者の日常生活にとって身近であるボランティ

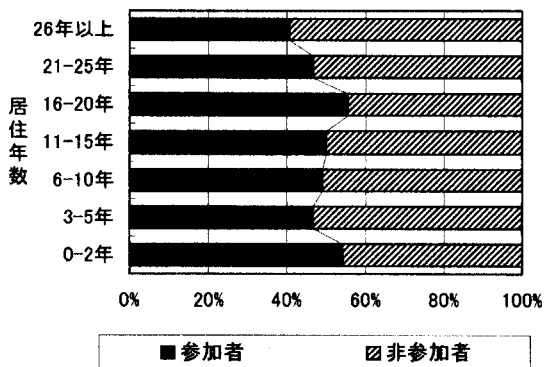


図3 ボランティア活動の参加と居住歴
(Aging and Participation in Sun City 1997より作成.)

ア活動への参加状況を詳しく見てゆく。

図3は、ボランティア活動についての参加／非参加と、居住歴を示したグラフである。居住年数グループを見ても、居住歴の長さで参加／非参加者の割合はほぼ同一であることがわかる。注目したいのは、10年未満の居住歴であっても、およそ半数の人が活動に参加しており、コミュニティへの定住期間に左右されないことである。つまり、居住歴が浅くてもボランティア活動に積極的に参加してゆくことが何える。例えば日本の場合は、一定の定住期間を経ることで、ボランティアを含むコミュニティの活動参加に結びついてゆくことが指摘されている（倉沢1998）。これに対して、サンシティの居住者は、たとえ入居後一年未満の短い期間であっても、ボランティア活動への参加を開始する傾向にある。活動状況における日本と対照的な傾向は、サンシティ特有のものとして興味深い。ボランティア活動と居住者をつなぐ「お膳立て」が、居住歴の長さを厭わない参加を可能にしているようにも伺える。

また、このような居住者の活動参加の内容はどうだろうか。表3は、サンシティ居住者におけるボランティア活動の時間数などをまとめたもので

表3 サンシティにおけるボランティア活動

居住者の総人口に対するボランティア活動者の割合	39.6 %
活動者一人あたりの年間活動時間	324.0時間
年間8時間以上の活動日数	40.0日

(AZB, Arizona Business 2003より作成.)

ある¹⁰⁾。居住者のボランティア活動者の割合は、総人口に対しておよそ4割程度にも及ぶ。活動者一人あたりの年間活動時間数の合計は、324時間である。これは、アメリカの一般的なリタイアメントコミュニティ居住者の活動時間232.9時間に比べて、約1.5倍にもなる。また、一日8時間以上の活動日数見てみると、年間平均して40日である。これは、同じくアメリカにおける他リタイアメントコミュニティ居住者のボランティア活動日数21.1日に対して、約2倍である。

まるでフルタイム就業に相当する時間数で、年間40日前後にも及ぶ日数をもって、ボランティア活動に取り組むサンシティのボランティア活動状況は、アメリカ国内において比較しても、群を抜いた活発さである。

4.2 ボランティア活動参加者の活動事例

以上、サンシティにおけるボランティア活動の仕組みについてみてきた。本項では、この仕組み

が居住者を巻き込んだ結果、どのようなボランティア活動が展開され、その中でどのように居住者が活躍しているのかについて、具体的な検討を行うこととする。

既述したように、サンシティにおいて公共サービスを提供する主要なボランティア組織(表2参照)で活動する居住者に聞き取り調査を行った。

調査は、2006年3月に行い、活動者個人に質問票形式で行った。調査依頼に協力してもらったのは、サンシティビジターセンター、図書館、自警団などで働く居住者のボランティア活動者たちである(表4)。なお、インタビュー調査の協力者は、2004年度から継続している本調査の過去2回の滞在において、面識のある活動者を中心に、各ボランティアの3組織のメンバー(いずれもサンシティ在住)に対して行ったものである。

活動者たちの年齢は、平均63.3歳で、今回の聞き取り対象者は、A氏からF氏すべて女性である。彼女たちは、かつてサンシティ以外の地域でも、

表4 サンシティ居住者の活動参加

	A	B	C	D	E	F
年齢(歳)	66	80	76	67	76	84
居住歴(年)	15	12	19	4	19	15
主な活動組織	ビジターセンター visitor	ビジターセンター visitor	自警団 posse	自警団 posse	図書館 library	図書館 library
活動の内容	サンシティではビジターセンターの仕事を行っている。また自宅のある街では志願して、貧しい子どもたちのために服を縫っている。	ビジターセンターの仕事を行っている。主な業務は、サンシティ内のボランティア活動についての紹介・相談を行うことである。	事務仕事と遺失物取り扱い業務。自警団では、メンバーや業務のすべてに興味深い。かつては、自警団長も務めていた。	サンシティ内の巡回、交通整備を行う。メンバーの教育や研修をする。	書籍の貸出・返却の受付をする。リクエストされた書籍を検索する。教会では、事務をしたり、賛美歌の伴奏も行う。	図書館での受付と書籍の案内をする。
活動歴(年)	10	6	17	4	19	14
活動頻度	週に1回(水・金曜日午前はソーイング)	週に2回	毎日	週に5回	週に2回(週に10時間は教会での活動。)	週に4~5回
活動継続の動機	他の人々と働くことは、自分の生きがいであるから。	友人が活動の良さを教えてくれた。友人関係のため。	サンシティの居住者の生活を助けるため。コミュニティ全体のために役立ちたいから。	他人や居住者を助けたいから。他人の力になりたい。	自分が引退して時間ができたため。また母親が私に勧めてくれたから。	図書館や書籍が、若い世代だった頃から大好きだったから。
活動での問題	自分のしたいことのすべてを、十分に達成していない。	サンシティのことに、まだまだ十分知らない。	今引退している人々は、自分たちが行っているほど、ボランティア活動に集中していない。	メンバー同士が、もっと交流を深めべきだと思う。	仕事をするのに十分なボランティアでない。	特になし。

(聞き取り調査より作成。)

ボランティア活動を経験してきたという。

彼女たちのサンシティにおける居住歴は、一名を除いては10年以上であり、平均して約11.5年である。活動歴は、同様に10年以上であり、平均で11.6年となっている。以下活動歴に関しては、サンシティに入居してからのボランティア活動のことを指す。注目したいのは、居住歴と活動歴の関係性である。図3で見たように、入居から間もなく活動を開始する傾向は高いため、聞き取り対象者C、D、E、F氏に関しても、入居から2年以内の短期間でボランティア組織に参加していることがわかる。

活動の内容、頻度などについては、参加しているボランティア組織によって様々である。これらは、参加者の年齢や、個人のライフスタイル、ボランティア活動への価値観の相違によって、大きく異なるであろう。これは裏を返せば、どのような生活や価値観を持っている人でも参加を続けていけるというサンシティにおけるボランティア活動の仕組みの柔軟さでもある。

だが、サンシティの盛んなボランティア活動は、「お膳立て」の良さにだけ起因するものではない。仕組みの精巧さに加え、積極的な参加者である彼女たちの活動の主体性も無視できない、重要な要素であろう。そこで以下では、ボランティア活動継続の動機について個別なインタビュー事例に基づいて考えていく。

まずA氏は、ビジターセンターで週に1回の活動をしている。A氏は季節居住者で、冬の数ヶ月だけサンシティで居住する。「他人と働くことが生きがいである」といった言葉に象徴されるように、友人を含む社会関係の構築を、活動の充実とともに、目指していることがわかる。これは、同じくビジターセンターに働くB氏にも共通し、「友人関係のために活動」「友人が活動の良さを教えてくれた」と強調している。

またA氏、B氏に加えて、特徴付けられるのが、社会やコミュニティへの奉仕を目指していることである。これは、自警団で働くC氏、D氏に関しても、共通して言えることだろう。「居住者の生活を助ける」「他人の力になりたい」という彼女たちの意識は、ボランティア活動を自己の趣味や楽しみのためというよりは、他者を視野に入れた奉仕活動として捉えていることが伺える。

一方で、やはり引退後の個人生活の充実をはか

りたいと願う動機も存在する。図書館で働くE氏は、「時間ができたため」と述べ、活動に参加している動機は、あくまで自らの引退による生活の変化、時間的余裕のためとしている。同様に、図書館受付のボランティアF氏も「図書館が好きだから」という言葉のように、趣味に端を発した動機も存在する。だが実質的に、参加の動機がいかなるものであっても、週にかなりの頻度を継続して行っているE氏、F氏は、積極的な主体としてボランティアメンバーに加わっていることは、間違えないだろう。またその活動内容もサンシティの公共サービスを支えている奉仕活動、重要なボランティアであるということは確かである。活動継続の動機、参加のスタイルも含めてみても、多様なサンシティ居住者に適合したボランティア活動が展開され、その活動がサンシティのきめ細かい公共サービスの提供を上手く支えていることが伺える。

5 おわりに

わが国では地域コミュニティにおけるボランティア団体数および活動人口はここ数年間で増加しているものの、その活動従事者は、主婦などを中心とした特定の居住者集団であり、高齢者の存在はなかなか見当たらないのが実情である（小澤2001）。ピンチ（1997）が指摘するように、コミュニティ維持や地域福祉の担い手が特定の人材に頼られていることを考えれば、既存の担い手に代わる高齢者が、ボランティア活動の主体となることが持つ意味や可能性を、コミュニティの維持・発展に準えて考えることは重要である。リタイアメントコミュニティにおいて、引退者という立場の居住者が、公共サービスを支えるまでに至ったボランティア活動の仕組みを整理した。

第一に、バラエティーに富んだ活動メニューである。こうした豊富な活動メニューが整っていることによって、主婦やホワイトカラー、ブルーカラー退職者など多様な居住者の活動に対する意欲を満たし、彼らの知識・技術を存分に活かせることがわかる。結果として特定の分野に限らない、高齢者の幅広い活躍が実現されていた。

また第二に、活動参加までの単純な手続、つまりボランティア活動参加までのアクセスのしやすさである。入居当初から配布される登録申請書に



写真1 The Sun City Sheriffs Posse



写真2 Interfaith Services



写真3 移動用のゴルフカート



写真4 Sun City の一般的な住宅



写真5 リクリエーションセンター



写真6 ショッピングモールの様子

よって、居住者の生活や希望を詳細に確認し、模式図で示したようなボランティア登録までの流れによって、いち早く居住者と組織をつないでいた。これによって、居住者にとってボランティア活動をより身近なものにしていた。

そして第三に、活動に対する明瞭な評価である。居住者のボランティア活動による成果をHOAなどボランティア活動の統括組織が貨幣換算や、コミュニティへの経済効果・貢献度として示すことで、「目に見える成果」として参加者に提示していた。こうしたわかりやすい評価として明示することで、参加者たちにとって自分たちの活動を「やりがい」のようなものとして実感できるよう、意図的に設定しているようにも思われた。

サンシティのボランティア活動は、バラエティーに富んだ活動に、簡単な手続きで居住者を参加させることで、コミュニティの維持にとって重要な活動を居住者自身が積極的に担うことができる仕組みを持つことがわかった。このような活動の成果がコミュニティでの生活コストに関わる経済的効果として、また、社会的に必要性の高いものとして明確に評価されることで、コミュニティ全体の生活に貢献していることを改めて確認し、次なる活動へと展開することが理解できよう。

ボランティア活動を通じた高齢者の社会参加は、高齢者自身にとってばかりではなく、コミュニティ側にとってもその重要性が指摘されている。社会的役割から解放され、余暇時間が増大し、家庭・職場での経験に基づく知識や技術が豊富な高齢者は、ボランティア活動にとって非常に貴重な人材集団として期待されているからである。

そうした期待とは裏腹に、現状ではこうした活動を通じた高齢者の社会参加は決して盛んであるとは言えない。本研究の考察による知見から、問題点について触れるとすれば、まず、高齢者がボランティア活動で活躍できる分野の偏りという点が指摘できる。高齢者のボランティア活動は、福祉や自治組織など特定の活動に限られるため、多様な参加者の知識・技術がなかなか活かしきれていない現状がある。また同様に、活動開始までの手続きの難しさという点も指摘できよう。活動参加に関心がある高齢者がいても、申し込みの手順は複雑であり、しかも役所などが仲介する場合、窓口が非常に不明瞭であることが多い。しかも仲介組織つまりボランティアのコーディネーターが、

多くの場合役所の中に限られ、活動参加への間口が非常に狭い場合がある。

最後に、ボランティア活動に対する公的な評価という点も指摘しておきたい。ボランティア活動を経済的な価値として試算することが必ずしも良いことだとは言えない。だが、活動者自らの時間や労力、そして意欲をもって取り組まれるはずのボランティア活動の評価は、必ずしも明瞭ではなく、場合によっては、「当然の活動」のごとく社会に受け止められている¹¹⁾。経済的な評価であれ、社会を支える重要な要素として、目に見えるような評価をわが国のボランティア活動においても検討すべきではないだろうか。こうした特定の評価がなされないまま、今後市民ボランティアに行政や自治体で担っていた公共サービスや生活保障を一方的に任せてしまうとすれば、無償奉仕ができる人、つまり条件を満たす、ボランティア活動に参加できる人間は極めて限定的になってくるのではないだろうか¹²⁾。何の対価もなく、社会的な評価・許容もされないままに、自らの労力や時間を提供することを求められていくならば、経済的・時間的な余裕は勿論、精神的・肉体的な負担に耐えることのできる余裕を兼ね備えた人材こそが活動者の「前提」となってくる。この「前提」の有無が、意思を持てば誰でもできるはずのボランティア活動の参加を、断念させてしまう状況にもなり兼ねない (Andersen 1990 ; Breecher and Garrison 1992)。

日本の団塊世代は、アメリカのベビーブーマー世代が引退期を迎えるよりも早く、2007年から引退期のピークを迎える。引退後の生きがい作りや活躍の場を見出し、高齢者個人がいかに安定した生活を営むことができるかについての仕組みを検討してゆくことがより一層必要となるだろう。

謝辞

本稿の作成にあたり、サンシティに在住する皆様をはじめ、ボランティア組織を紹介して下さったビジターセンター、活動の詳細をご説明頂いたボランティア組織の皆様、厚く御礼申し上げます。また、アメリカでのフィールド調査に際して貴重なご助言を頂いた、お茶の水女子大学地理学教室の皆様、サンシティへの調査に参加させて頂き、終始ご指導頂きました國學院大學経済学部 田原裕子先生、神奈川大学人間科学部の平井誠先生に記して深謝致します。なお、本稿の作

成にあたっては、平成15年度－17年度科学研究費補助金（人口停滞・減少時代における新しい人文地理学の構築、研究代表者：石川義孝 課題番号）の一部を利用して頂いた。本研究の内容は、2005年度人文地理学会（於：九州大学）において発表した。

注

- 1) アメリカにおける近年のボランティア人口は、従来多数とされてきた高額所得者や高学歴の中高年齢層など、特定の人々に決して偏らないことが特徴付けられている。
- 2) 住居費用だけでも200,000ドル～500,000ドルと高額である。ちなみに、本研究で取り上げるサンシティの一戸建は、住居費用が55,000ドル～200,000ドルとなっている。こうしたリタイアメントコミュニティでは、コミュニティ全体が高い壁で囲われ、コミュニティと外部の間には通門所が設けられている。来訪者は訪問の目的を告げ、パスコントロールを受けることが義務付けられている。許可され、コミュニティ内に入ることができて、至るところに防犯カメラが設置され、部外者や不審者をいつでも管理人が監視できるセキュリティシステムを有している。コミュニティ内部には、広大なゴルフコースやフィットネスジムに加え、劇場や映画館などのアメニティ施設が整備されている場合もある。自家用車を運転して移動し、各居住者の世帯にはインターネットも普及率も高いため、居住者同士がほとんど干渉することがなく暮らせる。日常生活の煩わしさから開放され、まるで引退後の生活をリゾートに過ごすような居住環境である。
- 3) サンシティに身近な例を挙げれば、同じくアリゾナ州にあるヤングタウン (Youngtown) は、人口約2000人ほどのリタイアメントコミュニティであった。このコミュニティは、主に引退した教師を中心に構成されていた。財政難のため、現在は行政機関の統括する「市」に昇格している。
- 4) 1980年にデル・ヴェップ社が道路、公園、下水等の管理運営権をマリコパ郡に移譲した。
- 5) 納税額は、州内の他コミュニティの1/2～2/3程度である。税率も低い。例えば固定資産税については、同州内フェニックスが100ドルあたり16.1%なのに対して、サンシティが14.2%である。売上税に関しては、サンシティ居住者は課税されない (AZB, Arizona Business 1996)。
- 6) 1世帯に少なくとも1人の55歳以上居住者がいればよく、配偶者や同居人が全員55歳以上である必要はない。ただし18歳以下の子どもは、90日までの滞在は可能だが、居住はできない。
- 7) 避寒のために冬季だけをリタイアメントコミュニティで暮らすためこうした呼ばれ方がされている。引退を迎えたスノーバードは、安定した人間関係や福祉サービスなどを求めて最終的に定着し、コミュニティでの生活を送るようになる。
- 8) 1970年に設立したボスウェル記念病院は、当時のサンシティ居住者から集められた寄付金で建設したものである。
- 9) 2004年のサンシティホームオーナーズ協会での聞き取り調査によれば、入居者全員に対して配布する入居案内の封筒にこの登録申請用紙を同封するという。サンシティでは、コミュニティの情報は入居の当日から手に入れることができる。
- 10) 図3とは資料が異なるため、居住者の総人口に対するボランティア活動者の割合は若干異なる。
- 11) 高齢者という余剰労働力を地域福祉やコミュニティ維持などの無償労働に「導引」させるといった側面をボランティア活動は背負っている恐れがあるという点も指摘される (中野1999)。日本では、地域コミュニティにおけるボランティア団体数および活動人口はここ数年間で増加しているものの、その活動従事者が一向に主婦を中心とした女性が多く占めている現状がある。ボランティアの担い手は常に、非生産者ばかりに偏り、生産者である勤め人、特に男性がほとんど不在である。その背景には「無償を厭わないはず」だとか、「無償でやるべき」といった感情レベルでの強制や圧力も存在し、参加者の自主性や主体性などを無視した結果を招くこともあるだろう (岡原ほか1997)。
- 12) サンシティにおけるボランティアの需給関係が、リタイアメントコミュニティの「同一性」のもとで初めて成り立つものではないかという疑問もある (中鉢2003)。つまり、サービスの担い手であり受け手でもあるコミュニティ内の居住者が、等しく白人で、中産階級の引退者であるからこそ成り立つのではないかという点に関しては、注意が必要であろう。今後、こうしたエスニシティや階級、そしてジェンダーの視点は、高齢者福祉やコミュニティ研究の分野で無視できないものとして考察されていくべきであろう。

引用文献

- 阿部昌樹 2001. モラリズムを超えて－ボランティア・NPOの人づくり. 年報自治体学14: 29-38.
- 新井光吉 2002. 『アメリカの福祉国家政策』九州大学出版会.
- 伊藤公雄 2003. 『男女共同参画』が問いかけるもの－現代日本社会とジェンダー・ポリティクス』. インバク

- ト出版会。
- 小澤亘2001. ボランティア文化の国際比較. 小澤亘編『ボランティアの文化社会学』209-236. 世界思想社。
- 岡原正幸・山田昌弘・安川一・石川准1997.『感情の社会学—エモーション・コンシャスな時代』世界思想社。
- 神中洋子2000.『サンセットオンハイウェイ』文芸社。
- 菊池美代志・江上渉1998.『コミュニティの組織と施設』多賀出版。
- 倉沢進1998.『コミュニティ論—地域社会と住民行動—』放送大学出版。
- 谷口和江・浅野仁・前田大作1980. 身体的活動レベルの高い男性高齢者のモラル. 社会老年学12: 47-57.
- 田原裕子・岩垂雅子1999. 高齢者はどこへ移動するか—高齢者の居住地移動研究の動向と移動流. 東京大学人文地理学研究13: 1-13.
- 田原裕子・平井誠・稲田七海・岩垂雅子・長沼佐枝・西律子・和田康喜2003. 高齢者の地理学—研究動向と今後の課題—. 人文地理55(5): 45-67.
- 地域開発1994.特集・都市再生に挑戦する—アメリカのコミュニティ開発法人—. 地域開発360: 28-39.
- 手島陸久・冷水豊1992. 高齢者の余暇活動の測定に関する研究. 社会老年学35: 19-31.
- 中鉢奈津子2003. 場所アイデンティティの社会的構築. 石原潤編『農村空間の研究下』大明堂。
- 中野敏男1999. ボランティア動員型市民社会論の陥穽. 現代思想27(5): 72-93.
- 蓮見音彦編1991.『地域社会学-ライブラリ社会学』ライブラリ社会学。
- 平井誠1999. 大都市郊外地域における高齢者転入移動の特性—埼玉県所沢市の事例—. 地理学評論72A-5: 283-309.
- 藤崎宏子1994. 大都市高齢者の「住み続け」の条件. 総合都市研究54: 165-177.
- 本間信吾1982. 老人生活と社会活動. ゼロントロジー5: 9-19.
- 前市岡楽正1996. 高齢社会への態度. 経済学/経営学のために(後期号): 39-48.
- 光浦文夫1979.『講座 社会福祉8 高齢化社会と社会福祉』有斐閣。
- Andersen, Esping 1990. The Three World of Welfare Capitalism. Basil Blackwell Limited, London. 岡沢憲美・宮本太郎2001.『福祉資本主義の三つの世界』ミネルヴァ書房。
- Breecher, M. Maury and Garrison, Trey 1992. Small-Town America Wants You. New Choices, April 1992: 30-34.
- Del Webb 2003. Sun City's 40th Anniversary. Del Webb, Arizona.
- Herberger Center for Design Excellence, Arizona State University 1997. Aging and Participation in Sun City. Arizona Board of Regents, Arizona.
- Ken Meade Realty 1998. Sun City Arizona and the Surrounding Communities. Ken Meade Realty, Arizona.
- Kellner, Hansfield 1981. Sociology reinterpreted: an essay on method and vocation. Anchor Press, N.Y. ケルナー, H. バーガー, P.L. 著, 森下伸也訳1987.『社会学再考: 方法としての解釈』新曜社。
- LISC (2002) "The Whole Agenda: The Past and Future of Community Development" LISC Press.
- Morrison Institute for Public Policy School of Public Affairs, Arizona State University 1996. Resourceful Retiree Roundtable. The Senior Living Cluster, Arizona.
- Norman Krumholtz and Philip Star 1996. "Neighborhood Revitalization: Future Prospects" Revitalizing Urban Neighborhood. University Press of Kansas.
- Pinch, Steven 1997. Worlds of Welfare -Understanding the Changing Geographies of Social Welfare Provision. Routledge, London. ピンチ, S. 著, 神谷浩夫監訳2001.『福祉の世界』古今書院。
- Rex, R. Tom 1996. Several activities contribute to state's economic base. AZB, Arizona Business, October 2003: 1-6.

きむら おりえ

お茶の水女子大学 人間文化研究科 ジェンダー学際研究専攻